

「逆指名」で人材誘致 徳島県神山町

徳島県神山町は徳島市から車で45分ほどの山あいの町。町の面積の80%以上が森林です。人口は昭和30年代をピークに減少し続けて、現在は約6千人。高齢化率も46%と高く、少子高齢化に悩む過疎の町です。



しかし、数年前から芸術家や起業家などクリエイティブ（創造的）な人材の移住者が増えたり、都会のIT企業が次々とサテライトオフィス（本拠地から離れた場所に設置された事務所）を開設したりして、注目を集めています。

2011年度には町が始まって以来、初めて転入者が転出者を上回りました。なぜ、今、若者や企業が神山町に集まってくるのでしょうか？

その背景には「NPO法人グリーンバレー」と、その理事長である大南信也さんの存在が大きく影響しています。

◎NPO法人グリーンバレーの誕生

大南さんは、1992年に「神山町国際交流協会」を設立し、その事業の一環として、毎年国内外の芸術家3人を神山町に招き、町に滞在しながら住民と共に美術作品を制作する取り組みを行ってきました。

2004年からは、芸術家だけでなく、広い意味でのクリエイティブな人材へと

えを発展させ、起業家、IT技術者、クリエイター、職人などに職を持った人材の誘致を積極的に行うため、「神山町国際交流協会」から「NPO法人グリーンバレー」に改組されました。

グリーンバレーのメンバーは60人ほどで、「日本の田舎をステキに変える！」ことを使命としました。そして、「できない理由より、できる方法を」といかに始める」という2つの基本方針が掲げられました。

◎なぜ神山町に人材が集まるのか

グリーンバレーが活動を始めてまもなく、縁のきた芸術家などから移住したいとの声があがり、空き家の紹介などを依頼されるようになりました。そうした実績から、2007年には神山町から移住交流支援センターの運営を委託されました。

2008年にインターネットのホームページ「イン神山」を開設。神山町の古民家情報や暮らしが掲載され、建築家や映像作家、写真家、ITベンチャー企業家など創造的な仕事をする人たちが「神山は面白そうだ」と関心を寄せ、町にやってくるようになったようです。大南さんは「新しく町にやってきた人が新しい神山の魅力になり、さらに新しい面白い人を呼び寄せるという、連鎖と循環が起きています」と、話されています。

大南さんたちの取り組みはさらに進化し、空き家物件ごとに地元住民が希望する職種の人に入ってもらおうと仕組みも作られました。つまり、「この空き家にはパン屋さん」「ここにはデザイナーを」というように、その業種に合わせて物件を事前に改修して、住民側が移住者を「逆指名」する

のです。将来、町にとって必要な働き手や職種の人たちを集めようという考えです。こうした取り組みによって、住民の希望に当てはまるような移住者が神山町に集まるようになりました。グリーンバレーが運営する移住交流支援センターを経由しての移住者は、2010年度と2011年度の2年間で23世帯46名。このうち、子どもは12人とのこと。

◎古民家をサテライトオフィスに

2010年、IT企業のSannsanが、神山町の古民家を借りてサテライトオフィスを開設しました。この会社は、寺田親弘さんが2007年に創業した社員70名のベンチャー企業です。

かつて米国シリコンバレーで働いた経験のある寺田さんは、米国では当時すでに一般的になっていたテレワーク（通信回線を使った在宅勤務）などの働き方を目の当たりにし、刺激を受けたといいます。

学生時代の同窓生からたまたま神山町のことを聞いた寺田さん。「ビジネスで世界の働き方に革新を起こす」を企業理念として創業しただけに、神山町はまさに探し求めていた場所でした。即断即決でサテライトオフィスを設置することにしました。

もともと徳島県は、山間地域にも全域、光ファイバー網が整備されていて、神山町でもインターネット環境は整っています。それに加えて、グリーンバレーの取り組みによって、新しいIT企業を住民側が受け入れる素地ができていたこと、物件の賃料が安いこと、豊かな自然と地域の人のつながりがあることなどの魅力が町にあったことが決め手になったようです。

大南さんは「サテライトオフィスは企業

誘致ではなく人材誘致だ」といいます。寺田さんと大南さんの間では、最初こんな会話が交わされたようです。

《寺田》「Sannsanはまだ小さい会社だし、神山の人は地域貢献を期待されているかもしれませんが、正直いって、どんな地域貢献ができるのか私たちにわかりません」と《大南》「いや、いいんです。御社の本業が神山でちゃんと成立することを示して下さい。それが何よりの地域貢献です。」

将来の可能性の扉を開くこと。これ以上の地域貢献はないでしょう。

◎「創造的過疎」による地域再生を目指す

大南さんらが掲げているのが、「創造的過疎による地域再生」です。人口減少による過疎化は仕方がないものと受け入れ、将来の人口構成を持続可能な形に変えていく、という考え方です。人口が減ったとしても、高齢者に偏った町の人口構成を改善させることができれば地域の機能は維持できます。

やみくもに動くのではなく、将来のビジョンを明確にして、毎年、何人のUターン、イターンがあれば、地域が存続していけるか、はっきりした数値を算出して、その未来像に向かって活動を続けるという戦略です。

民間主導の人材誘致で変わった神山町。神山町以上に過疎高齢化が進んでいる上関町（高齢化率51%）を再生する方法として、大南さんたちの取り組みはとても参考になると思います。上関町でもこのような動きが起これば、未来に向けて大きく変わるきっかけがでると思います。

◎「わいわいタイムス」12月号は12月7日（日）発行予定です。

